

# 摺物にみる嘉永小田原地震

岡崎 佑也

はじめに

嘉永小田原地震は近年の地震学の分析によるとマグニチュード六・七、震源は神奈川県西部の足柄平野北端部にあたる現在の神奈川県足柄上郡大井町金子の北側、各地域の震度は現在の大井町と神奈川県南足柄市の一部が六〜七、小田原の城下町周辺は六、江戸の震度は四程度と推定<sup>(1)</sup>されている。

地震に伴い、小田原城では天守櫓をはじめ各櫓、諸門が大破や半壊したほか、二の丸の場合、小田原藩主の居館と藩庁を兼ねる御屋形が半壊した。一方、小田原城下のうち、町人地の小田原町では潰二〇軒・半潰一〇三軒・破損四三〇軒と、同町全体の約四割の家屋が被害を受けた。小田原

藩領の村落では合計三四〇〇軒余の家屋が被災した。地震全体の死傷者数は、小田原藩による調査の書上を筆写した史料によれば、領内全体で死者一一九人、負傷者は七〇〇人にのぼった<sup>(2)</sup>。

管見の限り、嘉永小田原地震に関する摺物は一の種類確認することができる(次頁【表】を参照)。そのうち①〜⑧までの八点は主に被害の範囲を絵図として伝える瓦版であり、残りの三点は主に風刺的な摺物である。

瓦版を含む摺物は、近世期に発生した災害を伝えた主要なメディアであった。なかでも瓦版は読売とも呼ばれ、災害や事件などのニュースを速報的な形で巷間へ伝えるために発行された一枚摺りの出版物である。他方、ほかの出版

【表】 嘉永小田原地震に関する摺物一覧

番号	表題	主な所蔵先	備考
①	相州箱根山小田原御城下大地震之図	国立国会図書館、八王子市郷土資料館所蔵	
②	相模国大地震	東京大学大学院情報学環・学際情報学府図書館所蔵小野秀雄コレクション	
③	(相模国の大地震)	東京大学大学院情報学環・学際情報学府図書館所蔵小野秀雄コレクション	②の異版カ
④	相模国大地震	神奈川県立図書館、東京大学総合図書館所蔵石本コレクション、東京大学大学院情報学環・学際情報学府図書館所蔵小野秀雄コレクション、藤沢市生涯学習部郷土歴史課、三井文庫各所蔵	
⑤	相模国・伊豆国大地震	山口県文書館（内田家文書）、東京都立中央図書館特別文庫室各所蔵	
⑥	相模国大地震之図	東京大学大学院情報学環・学際情報学府図書館所蔵小野秀雄コレクション、神奈川県立図書館各所蔵	
⑦	相州大地震画面	東京大学大学院情報学環・学際情報学府図書館所蔵小野秀雄コレクション	
⑧	相模国大地震之図	群馬県立文書館酒井家文書、藤沢市生涯学習部郷土歴史課各所蔵	
⑨	新板改正大蔵武鑑	国立国会図書館、東京大学大学院情報学環・学際情報学府図書館所蔵小野秀雄コレクションなど所蔵	武鑑のパロディー
⑩	(戯文、此春の大地震乃御おどろき何かたも)	国会図書館など所蔵	
⑪	相州小田原箱根地震くどき	神奈川県立図書館所蔵	地震口説

物とは異なり、徳川幕府の許可・事前検閲を得ていない、いわゆる無届けの状態で開催されたのが特徴である。一八世紀後半に人口の流動化で都市社会が成熟すると、身分や階層に関係なく、あらゆる人びとが客観的な情報を求めようとする動きが高まったとともに、瓦版の出版頻度も上昇していった。そのため、幕府は半ば瓦版の刊行を黙認していたともいわれる<sup>(3)</sup>。

一般的に瓦版は、明和九年(一七七二)の江戸目黒行人坂の大火を画期に出版し始めた<sup>(4)</sup>とされる。その後も天明三年(一七八三)の浅間災害などの折にも刊行されたが、文政一二年(二八二九)の江戸佐久間町火事を契機に、災害を伝える瓦版が大量出版されるようになり、とくに天保・弘化期(一八三〇～一八四八)が瓦版の発展期と指摘されている。北原氏によると、瓦版には単に被害状況を伝える類だけではなく、道化もの、戯画と呼ばれる婉曲な風刺性を含むバージョンも存在するという<sup>(4)</sup>。

瓦版の研究は新聞学・メディア学の分野で、近代以降の

新聞の前身的存在として取り上げたのが端緒である<sup>(5)</sup>。

歴史学(日本近世史)では、昭和五〇年代中頃から情報史への関心が高まるとともに、瓦版を近世期の重要な情報メディアとして研究されるようになった。なかでも北原糸子氏は瓦版や災害絵図、地震誌などの摺物を分析し、それらが民衆から武家層に至るまで、幅広い階層にとつての情報源であったと指摘した<sup>(6)</sup>。また同氏は嘉永七年(一八五四)

一一月の安政東海・南海地震の際に売り出された瓦版を事例に、その瓦版を「地域情報」(主に大坂の被害を掲載)、「広域情報」(大坂と大和国・紀州国など周辺国の被害を掲載)、「全国情報」(大坂から武蔵国に至るまでの幅広い地域の被害掲載)の三種類に分類した<sup>(7)</sup>。

一方、岩下哲典氏は情報論の側面から、幕末期の民衆の精神性と思想面を明らかにする上で、絵画史料のほか、瓦版・錦絵といった摺物の有効性と論じている<sup>(8)</sup>。このほか近年では、安政南海地震の瓦版を素材として大坂における津波の浸水範囲を特定した論稿<sup>(9)</sup>や、これまで取り上

げられることの少なかった火災瓦版の出版状況について追った成果<sup>(10)</sup>が挙げられる。なお、筆者も嘉永小田原地震の被害を伝える瓦版の各地への流布、瓦版自体の内容(内容の正確さと誇張した部分)の検討について試みている<sup>(11)</sup>。

瓦版と同様に災害を取り扱った摺物に鯨絵がある。鯨絵は安政二年(一八五五)一二月二日に発生し、一万人以上の死者を出した安政江戸地震の直後に大量に出版された。地震後二か月間で三〇〇〜四〇〇種類の鯨絵が発行され、江戸で爆発的に流行した。この鯨絵は鹿島大明神が要石で鯨を押さえつけて、地震の発生を抑えているとの古くからの伝承・信仰を背景に発行され、震災復興が進むにつれて、描かれる鯨の姿が「悪者」から「善者」へ変化しているのが特徴である。これには地震で被害を受けた人びとへの励まし、なぐさめとともに、安政江戸地震を契機とした「世直し」と「災害ユートピア」思想が込められているという<sup>(12)</sup>。

こうした鯨絵の研究は歴史学のみならず、文化人類学<sup>(13)</sup>、民俗学<sup>(14)</sup>、美術史<sup>(15)</sup>、宗教学<sup>(16)</sup>など諸学問でなされてきている。なかでも、富澤達三氏は大事件・珍事を図画と文字によって描いた錦絵を「時事錦絵」と定義付け、その代表である鯨絵やはしか絵を分析するほか、「時事錦絵」の分析を行う上での前提として瓦版も取り上げている<sup>(17)</sup>。

以上のように、摺物のうち瓦版や鯨絵については、先学によって研究成果が積まれている。ただ、災害時に刊行された摺物のなかには、武鑑をパロディー化したものや、狂歌のような戯文にして被害の有り様などを示した類、口説き節の冊子が刊行されており、かかる先行研究ではこうした摺物に関してはさほど触れられていないのが現状である。

他方、鯨絵には安政江戸地震を発生させた鯨とともに、安政以前の震災の鯨が描かれている場合がある。それによって、安政期の人びとが、安政江戸地震より前に発生した地震を、どのように捉えていたのかを検討することが可能であろう。これらの点を検討するべく、嘉永小田原地震に

関わる摺物を取り上げて分析していくことにする。

なお、近年は論稿ではないものの、摺物のうち、嘉永小田原地震の被害を伝えた瓦版を取り上げ、瓦版の図画や記述の変化から、刊行された時期や内容の差異について取り上げた小文が発表されている<sup>(18)</sup>。

## 一 あらゆる摺物―武鑑・戯文・口説き節―

### (一) 「新板改正大宗武鑑」

「新板改正大宗武鑑」は、小田原藩の武鑑をパロディー化したものであり、諸地震の際に刊行された摺物などを一冊にまとめた作成者不詳の風説留「落葉集」(東京都立中央図書館特別文庫室所蔵)に収録されている(「図像1」)。嘉永小田原地震とほぼ同時期に刊行された「嘉永武鑑」(「図像2」)では、小田原藩主を「大久保加賀守忠愨<sup>ただなお</sup>」と記載するところを、「小俵騒氣守震長」(「小俵とは「小田原」のもじり」となっている。また、通常「嘉永武鑑」では、「天保八西五月 家督」と藩主が家督を相続し、藩主に就任し

た年月が記載されるところ、「嘉永六年二月 跡吉」と嘉

永小田原地震が発生した日付となっている。また拝領物は、

小田原藩領を流れる酒匂川をもじった「酒匂之川十五枚」

と、「御時刻四ツ」と地震が発生した時刻の四つ時頃（午前  
一〇時頃）と表記されている。

加えて、菩提寺は当時江戸青山にあった天台宗の教学院  
ではなく、「太宗寺派 箱根山 大震寺」と箱根山周辺が  
被災したことになぞらえている。

一方、「新版改正大宗武鑑」には、家老など重臣の名称も  
洒落を用いて名付けられている。「コレカラ世加老」（↓こ  
れから良かるう、との意）として、まず地震鎮守の鹿島大  
明神と要石をもじった「鹿島要人」を挙げている。そのほ  
か「伊矢田土佐」（↓嫌やだとさ、との意）、「小田原評定」  
を做って「小俵兵儀」、「伊丹内蔵」（↓痛み蔵、との意）  
など地震被害になぞらえた家臣の名が連ねている。

これは年寄の欄も同様で、当時大地震が発生時には竹藪  
へ避難する人びとが多かったことから「藪坂阿部内」や、

藪のほか、瓦礫が散乱した道を歩くことから「足元守」が  
記載されている。

「嘉永武鑑」では「用人」の欄があるが、「新版改正大宗  
武鑑」では「用人」の洒落で「御用心」として「損野幾兵  
衛」、「大物入太郎」（↓物入）、「道野窪見」（↓道路の窪み  
（破損）、との意）、「山川止」（↓箱根山周辺の通行止め、  
酒匂川の川越停止、との意）など、震災後の用心すべき事  
象や部分を名称にしている。

この摺物の場合、「小俵家」の生国は信濃となっており、  
先祖は「飛田信濃守善光之後胤萬歳楽亭入道震安之嫡男、  
三條越後守震元二十六代小俵相模守之長男」と弘化四年（一  
八四七）の善光寺地震の子孫で、地震避けの呪文「萬歳楽」  
の嫡男、文政十一年（一八二八）の越後三条地震の縁戚と  
なっている。嘉永小田原地震のみならず、信濃国で甚大な  
被害を与えた善光寺地震、越後三条地震の存在もパロ  
ディー化されている。

他方、「嘉永武鑑」では、最後に後北條家以来の小田原城

主が記載されているが、「新板改正大宗武鑑」では寛永一〇年（一六三三）の寛永小田原地震、天和三年（一六八三）の日光地震、元禄一六年（一七〇三）の元禄地震、越後三条地震、文政一三年（一八三〇）の文政京都地震、善光寺地震など、以前に全国各地で発生した地震が列記されている。

この「新板改正大宗武鑑」が広く流布されていたことが他の史料から確かめられる。例えば、水戸藩家臣で藩校弘道校助教をつとめ、漢学者でもあった小宮山南梁による日記・風説留「南梁年録 八、九」（国立国会図書館所蔵）には、二月一四日の同藩家臣江戸詰の伊予玄龍からの書簡から、嘉永小田原地震発生の情報を得た一方、瓦版「相模国大地震之図」とともに、「新板改正大宗武鑑」が貼り付けられている（【画像3】）。また、尾張藩右筆安井重遠の手による、政治情報・世相記事などを収録した風説留「鶏肋集 嘉永六年春夏 十三」には、同藩七里飛脚からの嘉永小田原地震の被害情報とともに貼付されている（【画像4】）。

かたや、相模湾に面した相模国高座郡柳島村（現・神奈川県茅ヶ崎市）名主で廻船問屋を経営していた藤間善五郎（柳庵）の風説留「太平年表録 初編」には、嘉永小田原地震の被害の概略とともに、「新板改正大宗武鑑」が書き写されている（【画像5】）。つまり被害を伝える瓦版と同様に、内容はパロディーに溢れているが、嘉永小田原地震の発生を伝える摺物でもあったことが判明する。

また、「元禄十六未年江戸大地震百五十一年目」などと記されていることから、「新板改正大宗武鑑」を通して、過去の震災の存在を改めて想起させる契機ともなっていたのであろう。

## （二）戯文

嘉永小田原地震の発生後、地震発生と被害状況を謳った戯文の摺物も販売された。【画像6】は先述の「落葉集」に収録されているもので、作者は「御城下 雷まる」とある。これと同様の摺物は風説留「鶏肋集 嘉永六年春夏 十三」に収められている。紙幅に限りがあるため、この摺物の戯

文全てを取り上げられないが、「なかはの春にゆれさせられ、

鹿島の神様御事触」は鹿島神宮の神官が、春に地震が発生すると全国に触れ歩くことを表現している。また、「鹿嶋の神様へおはなし被遊候、おけしき相かまわずにけく敷御庭へ」と鹿島大明神の神託をよそに、地震が発生し庭へ避難することを謳っている。「にけく敷」とは、「にぎにぎしく」を掛詞にしたものだろう。地震鎮護の神として信仰されていた鹿島神宮（鹿島神宮）や鯨をテーマにした戯文が散見される。

また、挿擧した戯文もみられる。「万歳楽御ふた方様夜毎々の大地震ハ御うらやましく御事より存参らせ候」と、ここでの「万歳楽」は呪文除けではなく、太夫・才藏の二人が予祝の祝言などを述べたために練り歩く門付芸の「万歳」を意味していると思われる。相次ぐ大地震（余震のことカ）で家々へ地震除けの呪文を述べて稼いでいることを意味しているのだろうか。この他、「家々修ふく前にて御心細く思召被下候」と家屋の修復が未だ修復できていない

状態で、心細い状況が読み取れる。

一方、小田原や箱根を取り上げた作品もあり、「箱根八里の山続きはずし御限りのふ宿々損参らせ候」、「八千代を始竹藪へ早く御逃く敷入らせられ候との御事、相州小田原様かた」と箱根宿の被害状況や、小田原藩主らが竹藪へ逃げる様子を風刺している。

他方、善光寺地震の存在を意識した戯文が記載されている。「いらせられ先もし信濃国善光寺より此地より移らせられ候、御事替わらず強く」と地震の源が、先ごろ善光寺から小田原へ移って強震を発生させたとある。

なお、この戯文の摺物は尾張藩石筆安井重遠の風説留「鶏肋集 嘉永六年春夏 十三」<sup>(19)</sup>にも貼り付られていることから、広く流通されていたものと考えられる。

(二) 「相州小田原箱根地震くどき」

「相州小田原箱根地震くどき」（以下本章では「地震くどき」、[図像7](#)）は、嘉永小田原地震の後に刊行された、いわゆる口説き節の摺物の一種である。口説き節とは俗曲の

一種で、瞽女などが市井の情話、心中物などを歌物語にして、三味線に合わせて歌ったものを意味する。災害の場合には被害の恐怖や哀感を歌ったものが多く、それらを摺物にして版行されるようになったのは越後三条地震が契機という<sup>20</sup>。それ以降、他の震災や火災の際にも、こうした口説き節が出版されるようになった。この「地震くどき」もその一種である。

さて、「地震くどき」の内容は概して地震被害への悲哀とともに、「海よりつなみを上て、下はさかハのわたしばまでも、山がくずれてひらちのごとく、のきをならべし御しろ下も今ハのはらとなりはてまする」などと被害が誇張された形で箱根や小田原などの被害状況を取り上げていることが特徴である。しかしながら、被害状況に関わる記載のうち、虚実を取り混ぜた内容もみられる。例えば「大手御門はミちんにくずれ」と小田原城正門の大手門の被害について記されているが、小田原藩側の被害書上によると、「大手渡槽大破、同所番所大破、同所北門大破」<sup>21</sup>とある。

また、「当所名物八ツむねつくり名代とらやのういろうみせもさてもむざんにゆりつぶされて、いへの下より火ハもへ上り」は、東海道小田原宿名物の菓「外郎」を発売する外郎家（屋号は「虎屋」）の被害を取り上げている。尾張藩年寄石河家の風説留「弘慶時事録」によれば、同藩小田原宿詰の七里飛脚によると思われる被害報告として、「彼八ツ棟作とか申て名高き外郎も潰候由」<sup>22</sup>と特徴的な建築様式である八棟造りの外郎家の店舗兼屋敷が倒壊したという。火災発生の記述は認められないが、正確に近い情報も記載されていることがわかる。

また「地震くどき」には掲載されている小田原城下の青物町、万町、大工町の被害が記載されるほか、「北ハつくゑに甲州口よ、西と南ハ三嶋にかけて伊豆の浜迄ゆりくづさるゝ、ひがし梅沢、大いそ手前、又ハ大山・あつぎをかけて（中略）ひびきわたりてゆりくづさるゝ」と津久井、甲州地域、駿河国三島、伊豆、大磯、大山、厚木も被災しているという。

こうした記載は、嘉永小田原地震の被害を伝える瓦版の内容と酷似している。かかる瓦版の一種である「相模国大地震之図」によれば、

【史料1】<sup>(23)</sup>

(前略) 相州小田原大久保加賀守様御領分御城下万町・青物町・板はし・りやうし町・すハ丁・寺町、御城角やくら并二町家をはしめとして、東ハ田村川辺・伊勢原・あつ木、萩の山中大久保長門守様御領分、陶綾郡神戸・井こ、大磯宿・平つか宿、中村・金子・す、川・ミのけ辺・大山大にそんず、(中略) 津久井郡上の原・青の原、とうし川辺、鼠坂・関野辺迄大かたのひ、きなり(後略)

管見の限り、津久井や甲州地方、駿河国三島が被災したことを示す一次史料が存在しないので、被害は皆無に等しかったと思われるが、「地震くどき」にみられる地域の被災状況が、瓦版にも同様に記載されているのである。

「地震くどき」は嘉永小田原地震の被害への哀感とともに、

ある程度風聞のような誇張した情報や表現をも入れつつ、概して読み手に被害を伝えることも目的に出版されたことがわかる。

二 鯰絵と番付に描かれた嘉永小田原地震

先述した通り、嘉永小田原地震から二年後の安政二年に安政江戸地震が発生した。その発生後、爆発的に鯰絵が流行した。その鯰絵に嘉永小田原地震を引き起こした鯰が描かれている場合がある。

「地震御守」(【図像8】)には文政京都地震、善光寺地震嘉永七年(一八五四)七月九日の伊賀上野地震を発生させた鯰(画中では「伊勢」となっている)とともに、嘉永小田原地震を引き起こした地震が描かれている。この鯰絵では、これらの鯰が、安政江戸地震を招いた鯰を懲らしめている。鹿島大明神の前で謝罪するテーマが主題となっている。地震の要因となった鯰が、鹿島大明神の前で取り調べを受ける鯰絵は他にもみられる。【図像9】の鯰絵には越後三条

地震、善光寺地震、大坂の地震（安政南海地震カ）などとともに、嘉永小田原地震の鯨が描かれている。

【史料2】（24）

しんしう「わたくしのつみをゆるしてくださいならば、  
信しうもかまどもなつちもいらねへ

小田はら「どうぞとがのせんぎハ、をだはかになれば  
いゝが

ゑちご「わたくしハ、ゑつちりゑちごのぢしんゆへ、  
かくべゑのやうにさかさになつておわびをまうします

（傍線部は筆者による）

越後三条地震の鯨が、越後の角兵衛獅子のように逆さになつて詫びると述べるとともに、嘉永小田原地震の鯨も鹿島大明神側に大槌で叩きのめされて、裁きを受けている安政江戸地震の鯨を案じ、歎願する様子が描き出されている。

また「地震太平記」（**図像10**）という鯨絵には、元禄地震、宝永四年（一七〇七）の上方筋の地震（宝永地震）、文化元年（一八〇四）の出羽国の地震（象潟地震）、越後三条

地震、文政京都地震、善光寺地震、安政江戸地震の各地震を引き起こした鯨とともに、嘉永小田原地震の鯨も描かれており、それぞれ鹿島大明神に謝罪をしている。嘉永小田原地震の鯨は「わちきハ嘉永六年にさうしうの小田はらとやらを、ちつとのことのかんしやくからゆすぶりまうしいんしたが、あとでおもへハわるうおつした」<sup>(25)</sup>の謝意の弁を述べている。

次に地震や火災のランキングを摺物にした、いわゆる「一番付」を取り上げることにはたい。

【**図像11**】は安政江戸地震の直後に刊行された「地震出火競」という題名の地震・火災番付である。小結の欄に「嘉永六 小田原大地震」とも詫める文言がみられる。この小結の「小田原大地震」は嘉永小田原地震を意味するものと推測される。

善光寺地震（大関 弘化四 善光寺 開扉大地震）、越後三条地震（関脇 文政十一 越後大地震）のほか、元禄地震（前頭 元禄十六 関八州大地震）、マグニチュー

ド八・四の巨大地震である嘉永七年（一八五四）一月五日の安政南海地震（「前頭 安政元 大坂大地震」）とともに嘉永小田原地震が上段にランクインされている。

このように安政江戸地震後に版行された鯨絵や番付をみていくと、安政期の人びとにとって、嘉永小田原地震は近世後期に全国各地で発生した大地震の一部として捉えられたことが判明する。

## おわりに

本稿では嘉永小田原地震の後に刊行されたパロディー化あるいは戯文化された摺物、口説き節の摺物、そして安政江戸地震から間もなく版行された鯨絵や番付を取り上げた。かかる摺物から以下の点が導き出せよう。まず安政年間の人びとにとって、嘉永小田原地震を近世後期に全国で発生した地震の一種、近世期に発生した大地震のひとつと捉え、位置付けていた点である。「地震出火鏡」をみると、関東地域の地震も少なくないなか、嘉永小田原地震は「小結」

と上位に位置している。なおかつ、嘉永小田原地震から間もない幕末期の安政年間の刊行とは言い、南関東や伊豆半島東岸で大津波被害をもたらし、一万人を超える死者を出した元禄地震や、大坂市中が大津波に見舞われ、三〇〇人以上の死者を出した嘉永七年の「大坂大地震」（大坂の大津波は、安政南海地震の特徴的被害を示している）よりも高位にランクインされている。このことを鯨絵の描写と併せて鑑みると、安政年間においては、とくに関東地域のなかでは嘉永小田原地震を相当な大地震と把握されていたのではないだろうか。

次に嘉永小田原地震の摺物を通して、当該地震が過去の大地震の存在を回顧する契機となった点である。本稿で取り上げた摺物では、とりわけ善光寺地震の存在が想起されている。また嘉永小田原地震より一〇〇、二〇〇年以上前の寛永小田原地震、日光地震、元禄地震などの存在を振り返る機会ともなっていたことは注目すべきであろう。

最後に本稿で紹介した摺物は単なるパロディーや風刺、

悲哀感に留まらず、被害を伝えるニュース性も含まれていたことである。とくに「相州小田原箱根地震くどき」では主として小田原城下や東海道筋、大山、そして大山への参詣客が多く利用した矢倉沢往還の宿場町（厚木）の被害が

口説き節に乗せて描き出されている。これは、この摺物の作り手がそうした地域の被害を載せることも目的に刊行したことのあらわれでもあろう。その一方、読み手もかかる箇所 of 被害について少なからざるの関心を抱き、それに関わる風聞的な性格なものも含めた、あらゆる情報を求めていたことがうかがえる。

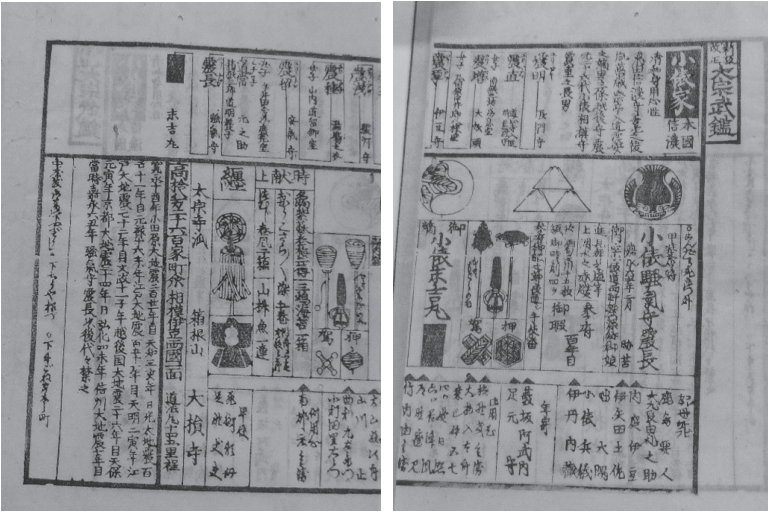
また「新板改正大宗武鑑」が各地へ流布していた事実は見逃せまい。この摺物は風刺的要素がメインであるが、嘉永小田原地震が発生した事実を知る上で、有効性のある情報であったのだろう。また風刺自体、地震の存在を伝える情報の一類型だったのかもしれない。

かかる摺物から、嘉永・安政期の社会、人びとが一地域で発生した地震に対していかなる意識を抱いていたのか、

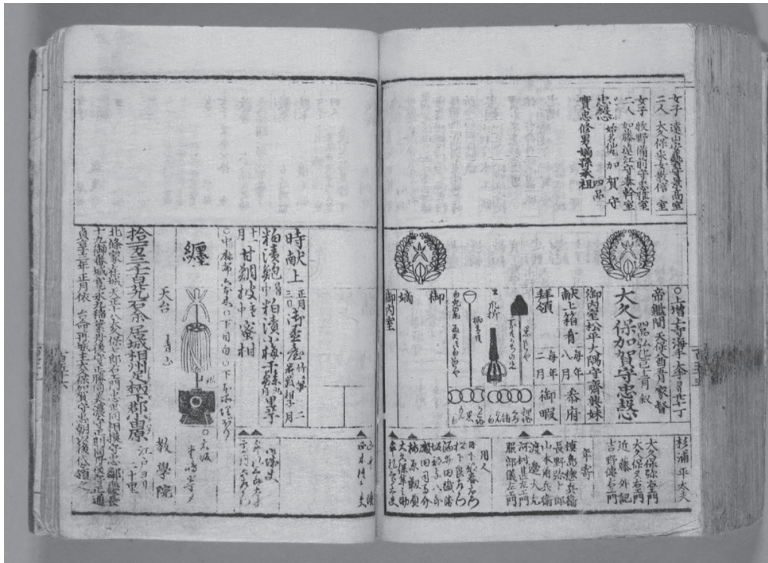
あるいはどのような情報を作り手が発信しようとしていたのか、また読み手の情報獲得の様相をも浮かび上がらせることができる。

本稿ではパロディー化、戯文化、風刺化を主とした摺物を摘記したが、現在ではこのような出版物を刊行しようものなら、「不謹慎」と糾弾されるかもしれない。しかしながら、このような揶揄や皮肉な笑いを主題とした摺物から、先行研究で指摘されている「世直り」思想とは異なり、災害の発生に対して、せめて笑いを通じて災害そのもの向き合おうとの思いが感じ取れる<sup>(26)</sup>。そうした心性が具現化されたのが、「新板改正大宗武鑑」であり、戯文でもあり、そして絵巻であったのではないか。今後は災害後に発行された摺物を丹念に検討することで、近世人の災害後の心性を改めて問い直してもよいのではないだろうか。

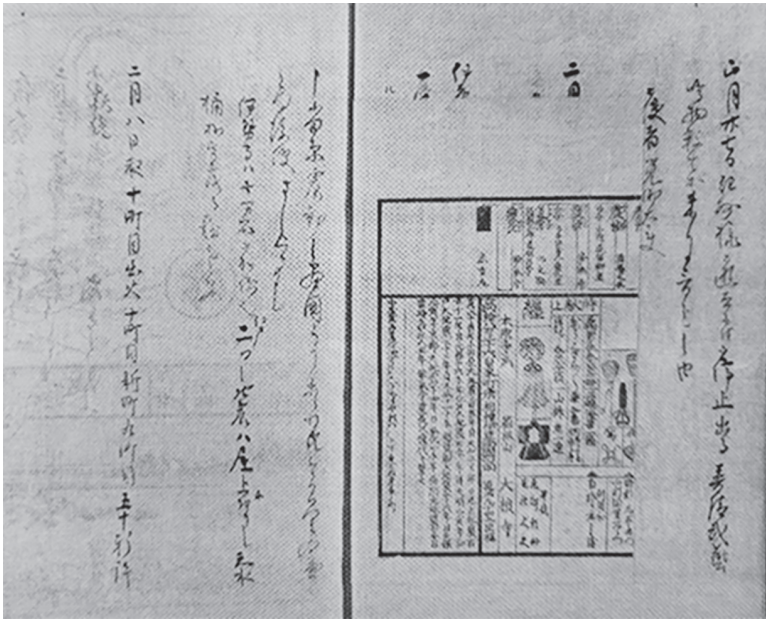
【図像1】「新板改正大宗武鑑」  
 (「落葉集」 東京都立中央図書館特別文庫室所蔵)



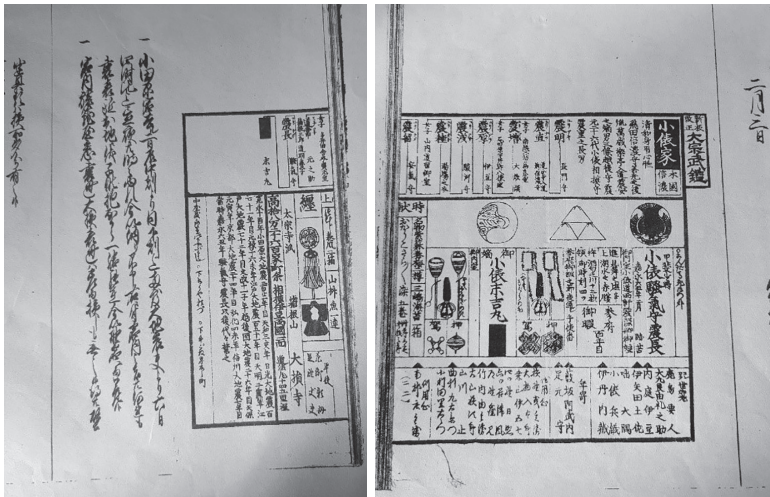
【図像2】「新板改正嘉永武鑑」  
 (三井文庫旧蔵資料、国文学研究資料館所蔵)



【図像3】「南梁年録八、九」（国立国会図書館所蔵）

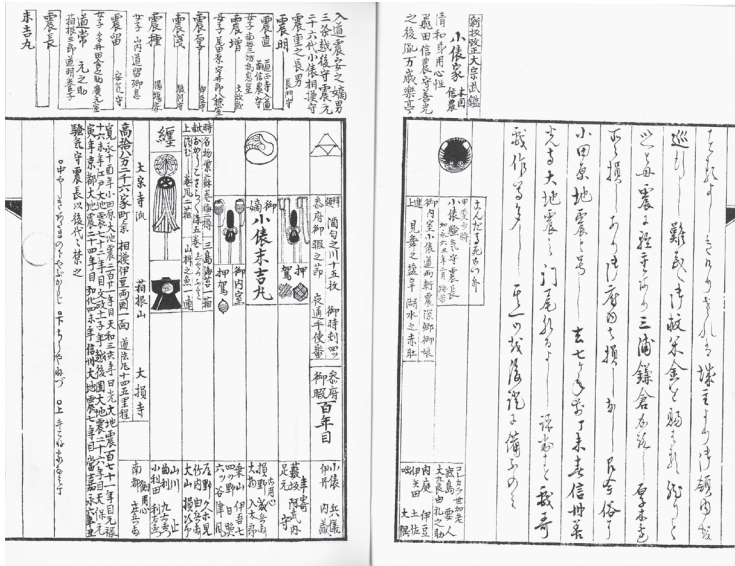


【図像4】「鶏肋集 嘉永六年春夏 十三」（名古屋市蓬左文庫所蔵）



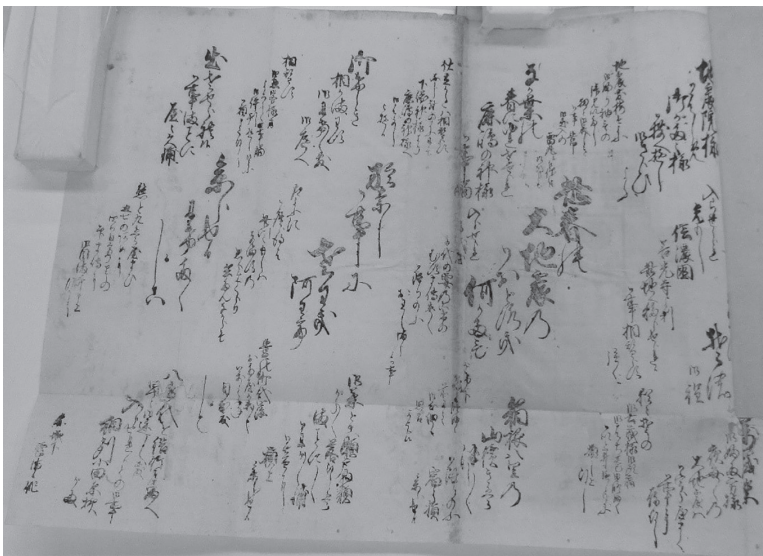
【図像5】「太平年表録 初編」

（藤間家文書、藤間柳庵著『太平年表録』復刻版 二〇〇七年、藤間雄蔵、初編より）

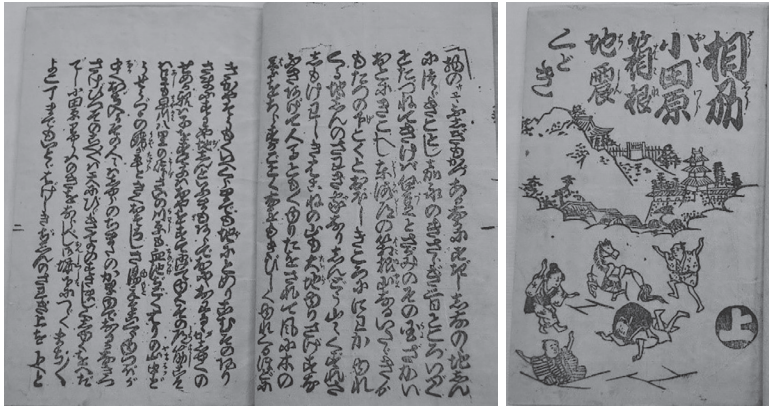


【図像6】（戯文、此春の大地震乃御おどろき何かたも）「落葉集」

（東京都立中央図書館特別文庫室所蔵）

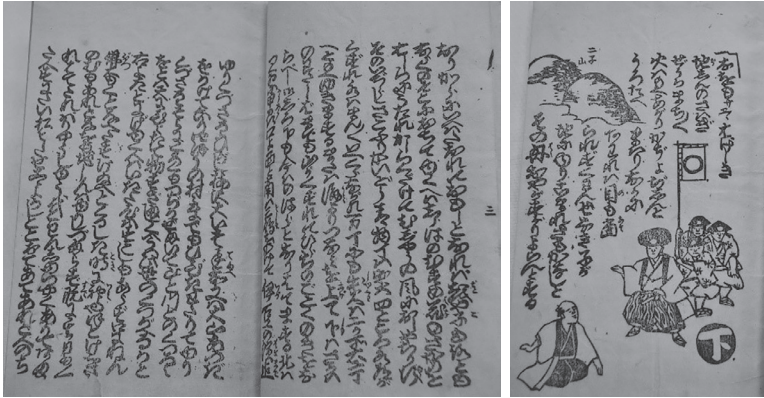


【図像7】「相州小田原箱根地震くどき」(上)  
 (神奈川県立図書館所蔵)



へ物のサエ、ふしきもかづあるなかに、すぎししなの、地しんにつきき、  
 ことし嘉永のきさらぎ二日、ところいづくもたづねてきけバ伊豆とさが  
 みのその国ざかい、おとにきこへし東海道の箱根山なるいたゞきも、  
 たつの下ごととおほしきころに、にわかによれくる地しんのさわぎ、家  
 なりしんどう山々くすれ、さしもけわしきはこねの山も大地ゆりさげ、  
 すなふきあげて、人馬ともくゆりたをされて、風に木の葉をちらすが  
 ごとく、なをもきびしくゆれくるほどに、きかやそうもくいえくらまで  
 も地にとめりこむそのありさまに、すわや地しんといふまもあらで、お  
 に、おわる、かしくのせめか、親は子をして、子はおやをすてにげて  
 ゆくその道筋こそは、足も早川八里の峠、さいの川原も血池ちごく、は  
 りの山中どうせうづかの姥が平ときくおそろしさ、湯元、そこらゆつ  
 ぽが中へおち入るその人々ハ、しゆらのちまたのかまゆでなが、なき  
 つさげびつ、そのこへくは天にひびきてものすさましく、しゆくをへ  
 だてし小田原りやうハのきをならべし御城下に、つゞくまちくよこ丁  
 までもいとゞはげしきちしんのさわぎ、上を下へと老若男女にける足も  
 と、足がる丁もよこよたてよと、らんかんはしの大手御門ハミちんにく  
 ずれ、矢倉二ヶ所ハゆりたをされて、ぢしんますくきびしくあれバ、  
 当所名物ハつむねつくり名代とらやのういろうみせも、さてもむざんに  
 ゆりつぶされて、いへの下より火ハもへ上り、天をつらぬく大火となれ  
 ば、なをもさうどう大方ならず、おとのさまよりおてあてなざる人す足  
 がるやく人はじめ、大手さきまでしゆつやくあれど神もおよばぬ天さい  
 なれば、さらにしかたはあらおそろしき ヤンレエ、

【図像7】「相州小田原箱根地震くどき」(下、一部抜粋)  
 (神奈川県立図書館所蔵)



へなをもサエ、はげしき地しんのさハぎ、せうかまちく火ハもへあがり、かぢよぢしんとうろたへまハリ、なかにあわれは目も當らず、くわんげなき子が地にゆりこまれ、さもかなしとその母おやがすがりよらんとするおりからに、いへハたおれておもしとなれバ、越や子もろともならくのそこにおちてゆくへハしらはのむすめ、花さかりをはしらにうたれ、からくだけてむじやうの風に、おしやちり行そのいぢらしさ、こふりかいどう青物丁ハ出火四ところ、水道がくずれ水ハまんくいへくらながれ、万丁にも出火ハ二か所、大工丁へともへゆきます、またハ海よりつなみを上て、下はさかハのわたしばまでも、山がくずれてひらちのごとく、のきをならべし御しろ下も今ハのはらとなりはてます、北ハつくぬに甲州口よ、西と南ハ三嶋をかけて伊豆の浜迄ゆりくづさる、ひがし梅沢、大いそ手前、又ハ大山・あつぎをかけて、六り四はうの村々までもひびきわたりてゆりくづさる、そらにくろくも、つぢかぜまいて、山と川とのくつる、をとほ、天にひゞて物すざましく、今ハ此世のくつがへるか右よ左とにげゆく人ハいた心ハすこしもあらず、口にねん仏大もくとなへ、たすけ給へとくるしき時に神やほとけをたのむもあれど、なをも地しんはゆりしづまらず、既に其日もくれはてたれば、りやうしやう代くわんしゆつやくありて、あまた人ずりたい松もたせ、こ、かしことおてあてあれど、人のちからもをよびあらず(中略)か、るふしぎを三しまのしゆくくの神のちからの今あらわれて、つ、がなきみハしんるいゑんじやをやこ手に手をとりかハされてほつとひといき、よろこびなみだ ヤンレエ、



【図像10】「地震太平記」

(東京大学総合図書館所蔵石本コレクション)



【図像11】「地震出火競」

(東京都立中央図書館特別文庫室所蔵)



- (1) 植竹富一・野口厚子・中村操「天明相模の地震及び嘉永小田原地震の被害分布と震源位置」(『歴史地震』第二五号、二〇一〇年)五八〜六一頁。
- (2) 「棕園雜記五」(名古屋市鶴舞中央図書館所蔵)、「地震二付 本家・土蔵・神社等取調帳」(片岡文書、小田原市立中央図書館所蔵)、「藤岡屋日記 卅九」(東京都公文書館所蔵)。
- (3) 小田原城下の被害の詳細については、拙稿「嘉永小田原地震における小田原町の震災対応」(『歴史地震』第三五号、二〇一〇年)を参照されたい。
- (4) 北原糸子「災害とかわら版―その歴史的展開―」(木下直之・吉見俊哉編『ニュースの誕生 かわら版と新聞錦絵の情報世界』(東京大学総合研究博物館、一九九九年)二五〜二六頁。
- (5) (3)に同じ
- (6) 朝倉亀三「本邦新聞史」(雅俗文庫、一九一一年)、小野秀雄「かわら版物語」(雄山閣、一九六〇年)、平井隆太郎「かわら版の一類型とその背景」(『新聞研究』一一五号、一九六一年)。
- (7) 北原糸子「安政大地震と民衆 地震の社会史」(三二書房、一九八三年、改訂版二〇一三年)九八〜一七五頁(この頁数は二〇一三年刊行の吉川弘文館版改訂版に拠る)、同「近世災害情報論」(塙書房、二〇〇三年)。
- (8) 北原糸子「近世災害情報論」(塙書房、二〇〇三年)二七〜四〇頁。
- (9) 山下哲典「幕末日本の情報活動―「開国」の情報史―」(雄山閣、二〇〇〇年)。
- (10) 堀健彦「1854年南海地震による大坂市中の津浪被害を描写した瓦版絵図について」(『災害・復興と資料』第一一号、二〇一九年)。
- (11) 策輪有朝「近世後期江戸における火災瓦版の展開」(『関東近世史研究』第九三号、二〇一三年)。
- (12) 拙稿「嘉永小田原地震における災害情報」(同右)。
- (13) 前掲註(6)二〇五〜二二頁など。
- (14) コルネリウス・アウエハント「鯨絵―民俗的想像力の世界―」(せりか書房、一九七九年)。
- (15) 宮田登・高田衛監修「鯨絵―震災と日本文化―」(里文出版、一九九五年)、細田博子「鯨絵で民俗学」(里文出版、二〇一六年)など。
- (16) 気谷誠「鯨絵新考―災害のコスモロジー―」(筑波書林、一九八四年)など。
- (17) 朴炳道「近世日本の災害と宗教―呪術・終末・慰霊・象徴―」(吉川弘文館、二〇二一年)二四五〜二九六頁。
- (18) 富澤達三「錦絵のちから 幕末の時事的錦絵とかわら版」(文生書院、二〇〇四年)、同「幕末風刺画と鯨絵」(『歴史民俗資料学研究』第二号、一九九七年)二〇〜三七頁、同「時事錦絵」としての鯨絵」(『史潮』第五〇号、二〇〇一年)四〜二五頁。このほか、「風刺画」としての鯨絵などの研究として、加藤光男氏の研究が挙げられる(『江戸っ子の「世論」形成と風刺画―鯨絵を素材として―』(地方史研究協議会編「地方史・研究と方法の最前線」雄山閣、一九九七年)八八〜一〇五頁など)。
- (19) 本多亮「嘉永小田原地震のかわら版」(『神奈川県温泉地学研究所観測だより』第七二号、二〇二二年)。
- (20) 「鶏肋集 嘉永六年春夏 十三」(名古屋市蓬左文庫所蔵)。
- (21) 前掲註(6)八六〜八七頁。
- (22) 「相州小田原大地震之記」(神奈川県立公文書館所蔵)。

(22) 「弘慶時事録」(石河家文書、徳川林政史研究所所蔵)。

(23) 「相模国大地震之図」(神奈川県立図書館所蔵)。

(24) 「地震鯨の取り調べ」(東京大学総合図書館所蔵石本コレクション)。

(25) 「地震太平記」(東京大学総合図書館所蔵石本コレクション)。

(26) 吉越昭久氏は自著で、近世期をはじめとする歴史時代は「災害を能動的に防ぐより、それを仕方のないこととして受け入れ(あるいは諦め)たり、被害がないことを祈る受動的な考え方が支配的」(吉越昭久『近世福山城下町の歴史災害』(文理閣、二〇二〇年)二〇二頁)であったと指摘している。この指摘は、今後の近世人における災害後の心性を検討する上で示唆に富む。